

変貌するスキー界の最前線で奮闘する者たち

喝采の舞台裏

A History of Interski

連載第2回

95シーズンの日本のスキー界最大のイベントはインタースキーである。
世界中のスキー教師がスキーの指導法と将来に思いを抱いて一堂に会する、
第15回インタースキーが1995年1月21日から野沢温泉スキー場で開催されるのだ。
日本は世界のスキー指導者から何を学び、何を発信しようとしているのか。
世界のスキーの潮流を振り返り、野沢で何が求められているのかを考えてみよう。
文・写真/志賀仁郎



今年1月に開かれた野沢温泉スキー場でのミニインタースキーで挨拶をするF・ホビヒラー教授(写真/上田勉)

「インタースキーって何だ。」
来シーズン、日本のスキー界の最大の話題は、第15回インタースキーが野沢温泉で開催されるということに違いない。

ところが、そのインタースキーについて、ほとんど何も知らされていない、という状況がある。

誰が来て、何をするのか、訳知りのオジサンは、「世界中のスキー教師が集まって、技術

を比較し合うスキー大会だよ」とのたまっている。「何だ、技術選の世界大会じゃねーか」と納得、ナットク。
ところが、「そうじゃねーよ、世界中からスキー教師が集まって聞く親善の集会なんだ」というオジサンもいる。
第15回というからには、かなり以前から続いている行事らしいとわかったところで、やっぱり、「インタースキーって、本当は何なの」という問いに戻ってしまおう。

オーストリアで開かれた戦後世界のスキーの扉

インタースキーの歴史は1951年に始まる。40年以上も前の出来事である。

オーストリア文部省の呼びかけて、オーストリアのアールベルグ峠のすぐ近く、ツールの雪の上に9カ国1000人のスキー関係者が集まった。

第2次世界大戦で中断されていたスキーの世界の扉を開こうといった思いが、この会議に込められていた。

約6年間に亘る戦争によって中断されていたスキー競技の世界は、1948年にサンモリッツ・オリンピック、1950年にアスペン世界選手権大会で再会されていたが、一般のスキー客にスキーを教えるスキー教師の世界はまだ分断された時代であった。

フランスのスキー教師たちは、1938年エミール・アレーが提唱したフレンチメソッドを普及させるために世界中に出て行った。

日本に戦後初めて海外からのスキー技法が紹介されたのは1955年、フランスの技法を携えて来日したピエール・ギョー、アンリ・オレイエの日本各地でのフランススキー講習会であった。

その技法は華麗であった。日本のスキー界は大きくフレンチメソッドに傾斜していった。フレンチメソッドは、戦勝国の技法として、敗戦国オーストリアへも浸透していった。

アールベルグの山々にもフランス語が飛び交い、フランスのスキー教師が活躍していた。そうした状況に、ツダルスキー、シュナイダー、ゼーロスを生み、アルペンスキーの宗祖と自負していたオーストリアの人々は、危機感を抱いていたはずである。

サン・クリストフのブンドスハイムにあって、新しいオーストリアスキーの研究に没頭していたステファン・クルッケンハウザー教授を中心に進められた、ツールの会合は、世界のスキー指導者が一堂に会する、インタ

仏墺の対立を刻むインタースキーの歴史

「スキー・コンGRESSとして成功を納め、その会議を第1回として1年おきに開かれることになった。」

1953年第2回ダボス、1955年第3回バルドイゼルと回を重ねる度に、この会議のムードは、険しいものになっていった。

フランスとオーストリアのふたつの技術、指導法の対立が鮮明になってきたのである。

ふたつの国の主張は、ことごとく対立していた。1955年オーストリアが発表したパインシュピールテクニクは、1952年オースロオリンピックで9個のメダルのうち5個を獲得し、ブンダーカード(素晴らしいチーム)と呼ばれたアルペンチームの名手たちのすべりを分析するなかから開発され体系づけられたのだが、それはフランスメソッドとは、すべての点で対立するものであった。

深まわりターンでフランスが上体を順方向へまわすローテーションを見れば、オーストリアはそれとまったく反対の上体を外側にひねる逆ひねりのフォームを採り、ターンのきっかけを作る部分ではフランスは沈み込み、オーストリアは立ち上がり、ふたつの国の技法はことごとく対立していた。

激しい理論戦争が勃発した。その対立は、インタースキーを表舞台として1968年の第8回アスペン大会まで10年以上も続けたのである。

インタースキーは、各国のスキー技術、指導理論の発表の場であり、理論闘争の場であった。

鎖国状況だった日本のスキーを変えた報告書

激しい対立のインタースキーの時代、日本は、また鎖国の状況にあった。海外渡航は認

められず、スキーで海外に出るチャンスは2年ごとのオリンピックと世界選手権大会に参加するわずかな数人の選手にしか与えられていなかったのである。

その鎖国の時代、1955年の第3回インタースキーをふたりの日本人が見学している。片桐匡(前SAJ副会長)と橋本茂生のふたりである。前年のギョー、オレイエの来日の際に講習会に協力した日本人のなかからフランススキー連盟の招待で2カ月間の渡欧が実現したのである。

シヤモニにある国立登山スキー学校(ENSA)に留学、そのとき、このインタースキーに客員として参加し、つぶさにこの会議を観察している。その報告は詳細を極め、フランス・オーストリアの2国の対立点にも明解な解説を試みている。帰国報告書といつていい片桐の「私が見たフランスのスキー」(新潮社)のなかにも22頁ものスペースを割いて、会議の様子が伝えられた。

インタースキーは、このふたりの報告によって日本のスキー界に大きな関心呼び起こすことになった。

「この会議は、お互いに自国のスキー教育方法を発表し、実際にデモンストレーションを行なって、批判し合うのが目的のようであった」と、片桐はこの会議の性格を伝えた。

1957年ストリーンの第4回、1959年ザコパネの第5回には日本人の参加はなく、その情報はほとんど入っていない。

1962年、イタリアのモンテ・ボンドーネの第6回インタースキーに日本の一般スキーの指導者4人が参加している。

SAJの理事で教育部(現教育部)の担当者だった大能勝朗、中沢清、西山実幾、柴田信一の4人が1955年の片桐、橋本のふたりに継ぐヨーロッパスキー事情視察の目的で派遣されたのである。

4人は、オーストリアスキーの総本山といえるサン・クリストフに滞在、オーストリアスキーの技術を学んだ。

「オーストリアスキー以外にスキーはない」というのが4人の確信であった。

その4人は、モンテ・ボンドーネの第6回インタースキーに、オーストリア代表団の客員として参加し、その実態を詳しく視察した。「次の1965年第7回バドガスタインインタースキーに参加しよう」という夢を持って彼らは帰国した。それは当時の日本の状況では、途轍もない大きな夢だったといっている。「競技スキーにはオリンピック、世界選手権大会があり、われわれの一般スキーにはインタースキーがある」SAJの教育部の人たちの熱っぽい思いは、1963年蔵王、1964年八方尾根で行なわれた、全日本スキー連盟デモンストレーター選考会から具体的な目標として動き出した。

オーストリアスキー 一辺倒の時代

1957年のコルチナ三冠王トニー・ザイラーの来日、58年59年のアールベルグスキー学校長ルディ・マットの来日、さらに1961年、クルッケンハウザー教授一行の来日、そして4人の理事たちのオーストリア留学と続いて日本中がオーストリアスキー一辺倒の時代であった。

デモンストレーターはいかにオーストリアスキーを身につけているかを基準にして選出された。

1965年、バドガスタインに派遣された日本のデモンストレーターは、平沢文雄、宮沢英雄、北沢宏明、丸山庄司、斉藤城樹の5人の名手であった。いずれも、クルッケンハウザー教授の講習会でアシスタントを務めた男たちであった。

第7回バドガスタインインタースキーへの公式参加は、日本の基礎スキー界に極めて大きな資産を作ることになった。

日本の基礎スキー界の今ある姿のすべてがこの第7回インタースキー参加によって形作られたといっている。

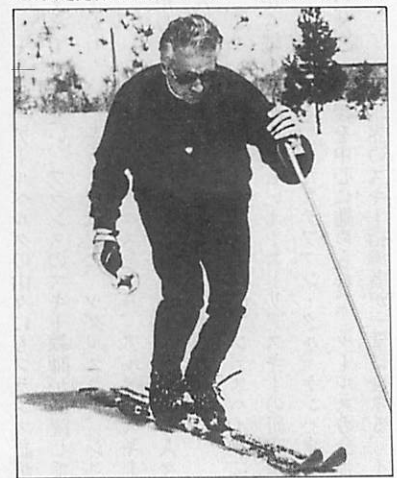
1964年の八方尾根でのデモンストレーター選考会は、30年におよぶデモ選、技術選

クルッケンハウザー教授の理論を実技として見せ、オーストリアメソッドの普及に貢献したフランツ・フルトナー(本誌'64第1集より)



1955年2月、片桐匡、橋本茂生のふたりは、フランス国立スキー学校に入学。写真は、シヤモニをバックに撮影したもの(小川勝次著「日本スキー発達史」朋文堂刊より)

1938年にフランスのスキー教師の代表としてフレンチメソッドを提唱したエミール・アレー(本誌'65第3集より)



戦後、日本のインタースキー参加までの間に来日して、 スキー復興につくした世界のトップスキーヤー

- 1954年 ●オレイエ(F)
- ギョー(F)
- 1957年 ●ザイラー(A)
- リーター(A)
- 1958年 ●マット(A)
- 1959年 ●マット(A)
- 1960年 ●ザイラー(A)
- 1961年 ●ヒンターゼア(A)
- デルブル(A)
- 1962年 ●アレ(F)
- デュビラール(F)
- デルブル(A)
- 1963年 ●クルッケンハウザー(A)
- フルトナー(A)
- ノイマエル(A)
- シュバルツエンバッハー(A)
- クテ(F)
- デルブル(A)
- 1964年 ●ボンリユー(F)
- エリクセン(Am)
- デルブル(A)
- バウムロック(A)

() 内は、A=オーストリア、F=フランス、Am=アメリカ



1954年にフランス技法を携えて、来日したアンリ・オレイエはロタシオンの技術を披露した(本誌'65第2集より)

のルーツとなり、デモを頂点とする、スキーヤーたちの技術信仰はこの行事を中心に据えて起きた流れなのである。

バドガスタインでの日本のデモに対する評価は、暖かいものであった。

「遠く東洋の国から来たクルッケンハウザー教授の孫たちは、オーストリアスキーをオーストリアのスキー教師たちよりも正確にしかもより優美に演じて見せた。」

当時、地元オーストリアの新聞にはそうした論評が寄せられたのである。

第7回インタースキーにおける論争点は、フランスかオーストリアかのテーマから、当時すでに世界中に広まったと思われた、スキーのバイブル「オーストリアメソッド」そのもののなかに生じた矛盾点に移っていた。

1955年発行された「オーストリアメソッド」は世界中の雪のある国々で翻訳出版され、オーストリアスキーはフランスの主張をしりぞけて、世界中に広がっていたのである。しかし、その発刊から10年余を経て、多くの矛盾が指摘されるようになった。

シュテムとパラレルのギャップというテーマが最大のものと見えたらう。

1955年のバイブルでは、シュテム・クリスチャニアのスキーの開きを少なくし、さらに踏み換えるタイミングを早くすれば、パラレル・クリスチャニアに到達できる。としていたのだが、左右のスキーを交互に操作するシュテムと、同時に操作するパラレルには運動要素の上で、越えられない壁がある、という指摘が出されていた。

オーストリアは、多くの内外からの攻撃に対し、新しい指導理論、技術体系の研究に取り組んでいたのだが、このバドガスタインには、まだその成果を発表できなかった。

アスペンで示された 合意と親睦への道

フランスかオーストリアかの論争は、新たな指導理論へ向けて大きく流れを変えようと

していた。

1968年、第8回インタースキーは初めて海を渡り、アメリカのアスペンで開催された。

参加国は18カ国に増え、地元アスペンの人の周到な準備と心暖まるホスピタリティによって、このインタースキーは、それまでの大会よりも華やかなものとなった。

日本からも、デモ8人を含め36人の代表団が渡米した。

アスペンのテーマは「世界のスキーをひとつに」とインタースキーが新しい方向に向かうことを示唆していた。

会議は和やかなムードのなかで進行していた。この第8回の主役は、またまたオーストリアであった。クルッケンハウザー教授と若き研究者、フランツ・ホビヒラー教授の共同論文として発表されたオーストリアの新しい指導理論は、古いオーストリア教程を全面的に改訂する考え方を示していた。

クルッケンハウザー教授は講演のなかで、「われわれは世界中の人々に支持されてきた、前教程を大幅に変える必要に迫られている。われわれは約8シーズンをかけて、子どもたちになにも教えずにスキーをやらせたらどうなるのかを実験してみた。その子どもたちの観察のなから、われわれは多くのヒントを得た」と語った。

そのヒントとは、子どもたちとトップレシーサーとの間に共通点が多いということなのである。

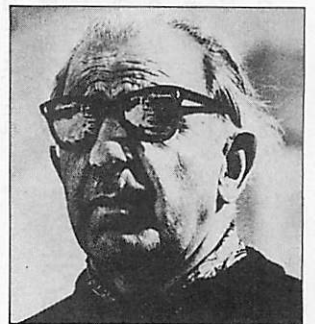
その共通項から導き出された、指導法は、従来の段階的に技術を積み上げてきた方式を否定するものとなっていた。

アスペンに同行したサン・クリストフの神童たちのスキーが注目された。

やや短めのスキーをはいて、両スキーを開いたスタンスですべる子どもたちのフォームはアスペンのトップレシーサーのすべるフォームにそっくりで迫力のあるすべりであった。

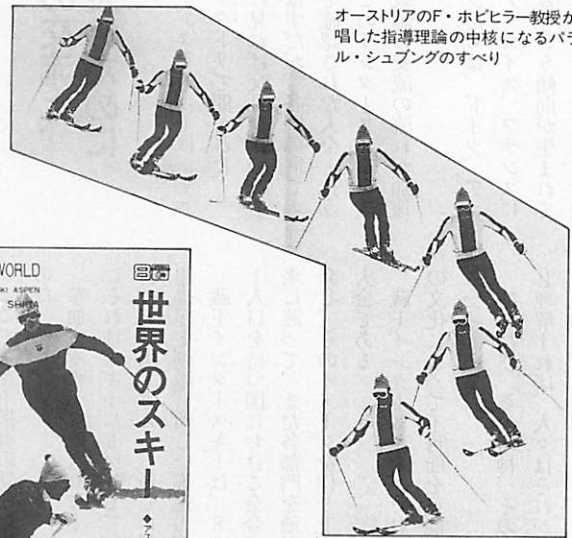
ワイドスタンスの斜滑降からブルークーフオールラインにまわり込み、再びワイドスタンスの反対の斜滑降に入る。その単純なター

オーストリアスキーの指導理論を確立し、世界のスキー界のリーダーであったシュテファン・クルッケンハウザー教授

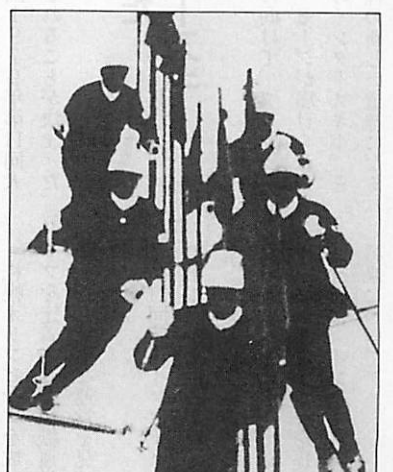


1968年に発表されたオーストリアの指導理論の核となったグルンド・シュブング（「オーストリアスキー教程」より）

オーストリアのF・ホビヒラー教授が提唱した指導理論の中核になるパラレル・シュブングのすべり



1967年、アスペンでの第8回インタースキーに参加した日本チームのデモンストレーション（本誌'69第1集より）



1965年にバドガスタインで行なわれた第7回インタースキーで、日本チームはウエーデルンの演技で喝采を受けた



1968年、アスペンでのインタースキーにおいてオーストリアとフランスの和解がはかられた

ンの技法にはグルンド・シュブング（基礎回転）という名称がつけられ、そのグルンド・シュブングを洗練させれば、より高度なパラレルターンになる、という簡潔なプログラムは、世界中のスキー指導者たちを納得させるものであった。

オーストリアは、精密に組み上げられた段階指導法を廃して、簡潔なトータルスキーイングへその思想を変えたのである。

前回まで論争の標的にされていた多くのテーマは、旧教程を捨てて作られたこの新しい指導理論の発表によって消滅してしまっただけでなく、フランスもまたこのアスペンで画期的な発表を行なった。

若い研究者ダニエル・ジョンベルが提唱した、ビラージュヌス・ボー（新フランスターン）は、深まわりに強い外向傾を見せ、そのすべりは従来のフランスの主張とは大きな違いを見せていた。

フランス・オーストリアの激しい理論闘争は、その両国の新しい発表によって消滅してしまっただけでなく、お互いに相手の研究を尊重し合い、学ぶべきものは学び、吸収できるものは取り入れるという、姿勢が確認された。

「世界のスキーをひとつに」とするインタースキーの理想が実現したのである。

わたしはこの第8回インタースキーを「アスペンの合意」と呼んだ。

国境を越えて、スキー技法を共同研究する

1971年、第9回はドイツのガルミッシュ・ユ・パルテンキルヘンで開かれた。

前回の合意の後を受けて、会議は華やかにそして和やかに進んだ。

その第9回インタースキーのテーマは、先進技法となった。

1967年から始まったワールドカップレースは、年とともに盛況となり、競争のピスは各国のエースたちのさまざまな前衛技法が試されていた。

フランスのキリー、リュッセルのアバルマン技法が目され、イタリアの新鋭トエニのすべりに関心が集まっていた。

ガルミッシュは、ピステに進行する技術革新をどう一般化するかをテーマとしていた。

各国から、前衛技法を解析した技法が発表された。

オーストリアのヴェーレン・テクニク、ドイツのシユロイダー・テクニク、スイスのOKテクニクがそれだが、日本からも曲進系技法と名付けられた前衛技法が提案された。

このガルミッシュでもっとも印象に残るシオンは、各国のナショナル・デモンストレーションが終わった日の夕方、特設された凹凸の斜面で行なわれた、前衛技法の合同デモンストレーションであった。

各国の名手たちが、ターフェルピステ（悪魔の斜面）と呼ばれたその斜面に展開したシオンは感動的なものとなった。

理論は理論としてあつたとしても、実際のすべりにはある困難な状況のなかではすべてのスキーヤーは同じような技法ですべるといふ事実がわかつたのである。

「スキー技法の探求と各国の共同作業」とそれはまた各国のデモに、技法の探求者としての姿勢を求めることになった。

スキー教師の交流と、一般への普及のために

1975年第10回インタースキーは、チェコスロバキアのピソケタトリで開かれた。

この会議は技術的に見れば交互操作のインタースキーといえたはずだが、各国の間での情報公開が実態として確認された大会と言う印象が強い。そしてこのインタースキーをきっかけにしてスキー教師の交流の流れが加速された。

一般のスキーファンたちは、ドイツ、アメリカからオーストリア、スイス、フランスにスキーをしに出かけるという傾向が生まれてきたが、その人々はどこに行こうと同じ技法ですべり、同じ指導が受けられるといった状況が生まれていた。「世界のスキーをひとつに」とする理想は完成していった。

このピソケタトリでは、もうひとつの大きな意義が確認された。

それは、開催国におけるスキーの普及に大きなきっかけを作ることであり、一般のスキーファンに新たな刺激を与えているという効果であった。

当時、社会主義国であったチェコスロバキアの人々にこの会議は明るい未来を予感させていた。

ピソケタトリで、次回1979年第11回大会が日本の蔵王で開催されることが決まった。

蔵王インタースキーに向けて、フランス・ホピヒラー教授からメッセージが届けられた。「1979年の日本でのインタースキー、それはこの会議の発展過程の新しい道標になるであろう。」

これまでの会議とは異なった大陸における異なった文化の国で開かれるのだ。

ここでスキー指導の新しい次元が開かれるのだ。

参加するすべての人々にとって新しい文化（それはスキーにも反映している）があり、新しい立場と考え方、新しい対比、新しい問題提起と刺激、新しい推進力がそこにある。

蔵王インタースキーは、800万人のスキー人口を持つ国における会合である。長い将来に渡って、また各部門を通じてこの国を紹介し、そのイメージを作り上げる機縁となる大会である。

蔵王インタースキー、それはその精神、その文化によって不可能にする国における会議である。

ひとたび、その精神、その文化に親しく接し理解すれば、人々はそれが空言ではないことを知るだろう。

1979年のインタースキー、それはエキスパートにも参観者にもスキーのあり方に新しい扉を開くものとなるだろう。

大きな期待が蔵王インタースキーに寄せられていたのである。

「不可能を可能とする国」とホピヒラー教授が表現した国、日本でのインタースキーはまさに教授が期待した以上のものになった。

各国の代表たちはこの巨大な祭典となったインタースキーに極めて好意的な評価を与え、世界中のスキー教師たちの連帯の意識を高めた親善大会として記憶されることになった。

蔵王で開かれた第11回インタースキー

蔵王インタースキーは、1951年の第1回から積み上げてきたこの運動の完成型といえたはずであった。

しかし、この蔵王での成功は、インタースキーに新たなテーマを提起することになった。

（次回、インタースキーと日本のスキーの将来について）